

## 災害文化遺産としての禹王遺跡と京都の治水神・禹王信仰

The Remains of Yuwang as Cultural Heritage for Disaster in Japan and Its Meaning of Belief of the God of Flood Control of River Kamo, Kyoto

植村善博

Yoshihiro Uemura

治水神・禹王研究会副会長・立命館大学歴史都市防災研究所客員研究員

Vice President of Association for the God of flood control-Yuwang Research

Visiting Reseacher, Ritsumeikan University, Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage

One hundred and sixteen remains of Yuwang (禹王) are distributed in Japan. Yuwang was a founder of Xia Dynasty in ancient China about four thousands years ago. But, Yuwang as foreign God of flood control was widely received by Japanese people. The remains of Yuwang are devided into statue, picture, temple and shrine dedicated Yuwang (or Wenming 文命) and monuments carved letter of Yuwang's name. Greater part of them have been established since mid- seventeen century. River Kamo in Kyoto was the first place of establishment of shrine dedicated Yuwang as the God of flood control in Japan. In Kyoto, there are three kind of remains of Yuwang. Pictures of Imperial Palace implies receiving Royal Family as good governor. Stone monument of Daihikaku Senkouji Temple compliments Ryoji Suminokura on his success in widening and shipping of Rivers Ooi, Fuji and Tenryu. Shrine of Yuwang at old Gojo bridge is a symbol of the belief of the God of flood control for resident by riverside of Kyoto.

**Keywords:** *remains of Yuwang, belief of the God of flood control, River Kamo, Kyoto*

### 1. はじめに

禹王とは約4千年前の古代中国において、黄河の治水事業を成功させ人民を苦難から救った英雄、舜帝から王位を禅譲され夏王朝の初代帝王となった伝説上の人物である。その事績は『尚書』や司馬遷『史記夏本紀』などにおいて述べられ、孔子は治水・善政の人徳優れた聖王として賞賛し、孟子や諸子百家らも優れた事績にしばしば言及している。黄河や長江流域には禹王を祀る禹王廟や禹王宮、大禹廟、また禹王の足跡にまつわる遺跡（禹王碑、禹穴、禹洞、禹陵など）が多数存在し、治水神として民間に広く信仰されてきた。しかし、禹王遺跡が日本にも存在すること、治水神として地域で信仰されてきたことなどについてほとんど研究されることがなかった。本稿では禹王遺跡の分布と特徴を明らかにし、これらが貴重な災害文化遺産であることを述べる。さらに、京都における3つの禹王遺跡の起源と性質を明らかにする。とくに、鴨川の治水神信仰の特徴を考察し、禹王遺跡が京都を代表する災害文化遺産であることを評価するとともに、災害対応の貴重なシンボルとして防災教育や減災活動に活用すべきであることを述べる。

### 2. 日本における禹王遺跡の分布と特徴

大脇・植村編<sup>1)</sup>は中国起源の外来の治水神・禹王の遺跡が日本に広く分布していることを初めて明らかにした。禹王遺跡とは黄河の治水英雄で夏王朝の創始者である禹王を祀る禹廟、禹の神像や肖像画、禹の名を刻んだ石碑や墓碑などを意味し、2013年に57件を記載した。その後も発見があいつぎ、2017年3月末には116件に達し、4年間で倍増している(図1)。今後も新発見が期待される。以下では2017年3月末デー

タにより考察する。

### 1) 禹王遺跡の形態

禹の彫像 2 件（禹金像、禹王木像）、肖像画 6 件、禹を祀る廟や宮、祭壇、禹王碑が 21 件、禹の名を含む碑文や物品が 70 件以上ある。

### 2) 分布

北は北海道千歳市から南は沖縄県まで日本の全土に分布している。関東地方が 34%と最多で、中部地方 30%と両地方で 6.5 割を占める。ついで近畿地方の 13%となる。府県別にみると、神奈川県 18 件、沖縄県 13 件、岐阜県 10 件、大阪府 9 件の順に多い。とくに、関東平野の利根川水系および酒匂川、濃尾平野の木曾三川、大阪平野と京都盆地の淀川水系という大河の流域に集中的に分布する。これらは、水害の多発地域をかかえ古くから治水事業が頻繁に行われてきた地域であり、下流に都市が発達している点で共通している。神奈川県酒匂川では禹王の名である文命を称する遺跡が 16 件と異常な集中を示す。

### 3) 建設年代

大きくみて、江戸期以前と明治期以後のものがほぼ同数であり、明治維新前後で遺跡数に大きな変化はみられない。日本最古の遺跡は京都鴨川の禹王廟で、安貞 2（1228）年建立の伝承をもつ（『擁州府誌』）。確実な史料では長享 2（1488）年の五条橋下の夏禹廟となる（『蔭涼軒日録』）。京都以外に中世以前の禹王遺跡は存在せず、その特異性が注目される。一方、これ以後数百年間は全く存在せず、江戸初期の 1630 年代から出現しはじめ、以後は全国的に分布するようになる。これは徳川幕府の文治政策により儒教思想と儒学中心の学問とが重視され、藩校や寺子屋の教育により全国的に禹王の事績が周知されていった反映だと考えられる。中国起源の外来神、禹王は江戸期以降に日本の伝統的水神である弥都波能命、速秋津姫、弁財天などの信仰の中に新たに受容されていく。明治以降の西洋化の風潮下においても、国や自治体による治水事業や土地開発、個人の顕彰などのために禹王遺跡は増え続けている。

### 4) 位置

遺跡の立地場所として河岸や堤防など河川近接地が最も多く、神社や寺院の敷地がこれにつぐ。墓地や学校、公園や道路などにも存在している。全時代を通して堤防や河川近くに建立され、治水神信仰や治水事業の英雄崇拜としての禹王認識が定着しているといえよう。

### 5) 目的

大局的にみると、①治水神信仰のシンボルとして禹王廟や禹王碑などの建立、②私財をなげうって地域の治水事業に貢献した人物の顕彰、③河川の改修や土地開発事業などの竣工記念、④聖人君主としての禹王崇拜などに分類される。とくに、①は利根川や酒匂川、揖斐川と輪中地帯、淀川下流など水害常襲地域の住民により広く受容、信仰されてきたものだ。②は犠牲的精神、信念、財力や技術などを駆使して地域の治水や土地開発に貢献、専心した人物を禹王になぞらえて顕彰したものが多い。具体的な人物として、川村孫兵衛（宮城県）、岡田宗山（栃木県）、酒詰治左衛門（茨城県）、舟橋随庵（埼玉県）、小久保喜七（千葉県）、田中丘隅（神奈川県）、中井清太夫（山梨県）、中村惣兵衛・松村理兵衛（長野県）、和田光重・金森吉次郎（岐阜県）、大橋房太郎（大阪府）、西嶋八兵衛（香川県）、一田久作（福岡県）、宗像堅固（熊本県）など多くの人物名をあげることができる。これら治水貢献者の功績や今日的意義はほとんど忘却されており、その再評価と普及は重要な課題といえよう。

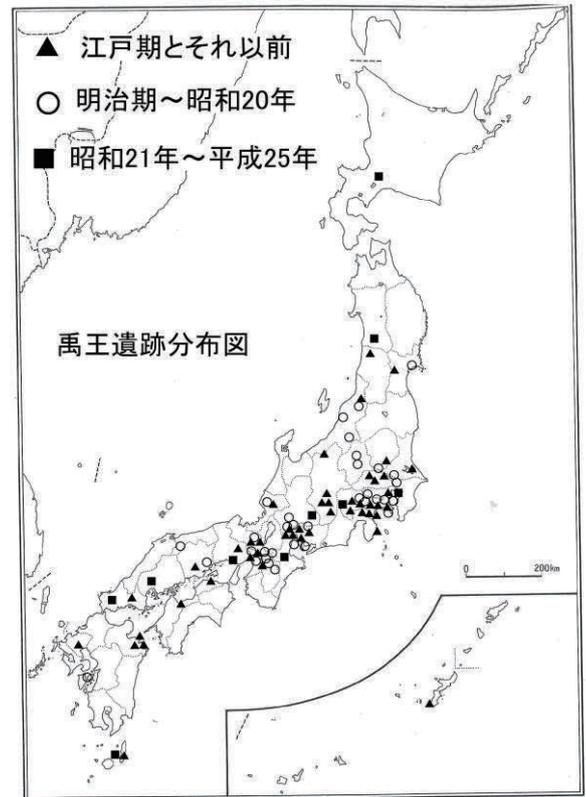


図1 日本における禹王遺跡分布図

### 3. 京都における3つの禹王遺跡とその特徴

京都には3件の禹王遺跡が分布する。以下、その性質と特徴をのべる。

#### 1) 五条中島の禹王廟

位置：京都市東山区松原橋付近（旧五条橋中島）日本最古の禹王遺跡である。『擁州府誌』「神社門夏禹王廟」の記述によると、安貞2（1228）年、洪水後の鴨川治水を命じられた勢多判官為兼が夢枕に立った異僧から鴨川東岸の南方に禹王廟を、北方に弁財天社を祀れと示唆され、これらを祀ったところ洪水は鎮静したという。また、禹王廟の位置について同「寺院門地藏堂」に「禹廟近世に至りて五条松原通河東にあり」と述べる。この禹王廟は近世初期には消滅していた。五条松原とは中世以前の五条通であり、五条橋は中島をはさんで二橋に分かれていた。五条橋の東側は六道の辻や葬送の地鳥辺野、清水寺観音など生と死が入り混じる聖地と認識されており、この橋は聖と俗との境界を意味した。さらに、この中島には安倍晴明に由来する法城寺や清明塚があったと伝える。その後、豊臣秀吉による京都の都市改造などの政策により破壊され消滅したとされ現存しない。詳細は後章で論じる。

#### 2) 御所御常御殿の襖絵『大禹戒酒防微図』

位置：京都市上京区 京都御苑御常御殿中段の間 安政2（1855）年、京都御所の再建時に際して狩野派絵師により御常御殿に多くの襖絵が描かれた<sup>2)</sup>。中段の間には『大禹戒酒防微図』が存在する（図2）。これは鶴沢探真が描いた6面の襖絵からなり、画題は禹王が飲酒によって国を滅ぼすとの思いから美酒を献上する儀狄を遠ざけたとする故事を描いたもの。天皇の日常生活の場に禹王の故事を示す絵が置かれたことは重要な意味をもつ。なお、上段の間には『堯任賢図治図』（狩野永岳画）下段の間には『高宗夢來良弼図』（座田重就画）が配置されている。これらの空間は南面しており、年賀の祝などの公的儀式に利用されてきた。なお、『大禹戒酒防微図』が最初に設置されたのは寛永18（1641）年で、当時の後水尾上皇を諫めるために描かれたと伝承されている。3図はいずれも中国伝来の『帝鑑図説』からモチーフを得ていると考えられる。治世者である天皇が心得るべき古代中国の賢明な皇帝の事績をテーマとして描いたものだ。日本の皇室に善政を行った聖人君主として禹王が浸透している事例として注目に値する。

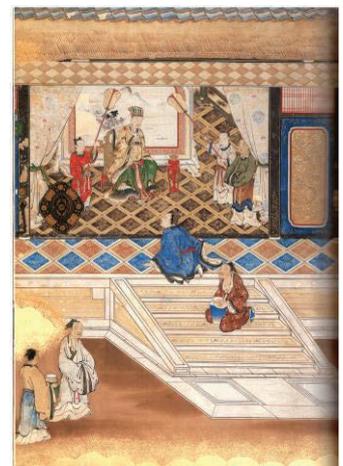


図2 大禹戒酒防微図

#### 3) 千光寺大悲閣の『黄檗高泉詩碑』

位置：西京区嵐山元禄山町千光寺参道嵐山、大悲閣を有する千光寺への参道入口に漢詩を刻んだ2本の石碑が建つ。黄檗宗万福寺（宇治市）の僧高泉性敦による七言絶句「登大悲閣」の漢詩を刻んだもの。向かって左側の碑文に「何人治水功如禹」（何人か治水の功禹の如し）と禹王の治水事績を詠み込んでいる（図3）。本碑は大正14（1926）年に森下仁丹の創始者で広告王と称された森下博により建立された。本碑文は角倉素庵が寛永7（1630）年千光寺に建立した著名な石碑「河道主事嵯峨吉田了以翁碑銘」の詩文に対する返歌となっている。すなわち、千光寺大悲閣は保津川開削を指揮した角倉了以が工事に従事した人々の菩提を弔うために創建した寺院である<sup>3)</sup>。本堂には千手観音像とともに、石割斧を持つ木造の了以像を祀る。角倉了以の実子与一（素庵）が了以の七回忌にあたり林羅山に撰文を依頼した『河道主事嵯峨吉田了以翁碑銘』が1630年に建立されている。碑文の大意は「誰が禹王のような治水の功をなしたか、川を大きく掘削した了以翁である」。周知のごとく、角倉了以は太堰川をはじめ富士川、天竜川など日本各地で困難な開削事業を成功させ、舟運を可能にして大きな地域貢献を成し遂げた。彼の事績が禹王に匹敵するものと顕彰する意図が明白に示される。なお、森下博が大正期に詩碑を建てた理由は彼自身の禹王への傾倒があったと推定される。大正12年に大阪緑藍会員による四条畷神社の大橋房太郎顕彰の『治水翁碑』（神禹の功の碑文と後藤新平の篆額をもつ）建立事業



図3 千光寺の黄檗高泉詩碑

にも関わっているからである。以上述べたように、鴨川禹王廟は治水神として禹王が信仰された重要な意義をもち、御常御殿の襖絵『大禹戒酒防微図』には天皇が模範とすべき聖人君主として禹王が、千光寺の『黄檗高泉詩碑』は角倉了意の河川事業を禹王の事跡にたとえて顕彰する背景がある。このように、京都には個性的な3つの禹王遺跡が存在する。

#### 4. 鴨川東岸の禹王廟と治水神信仰

京都の水害対応や減災の文化遺産として鴨川の禹王廟は重要な意味をもつ。日本最古の禹王遺跡であるとともに、禹王を治水神として最初に受け入れたのもまた京都人であった。瀬田<sup>4)</sup>によるとこの禹王廟は近世初期にはすでに消滅していたらしい。しかし、禹王に対する信仰は近世を通して存続していたことが山田<sup>5)</sup>により推定されている。以下にこの実態と意義について考察する。

##### 1) 五条橋下の禹王廟

前章で述べた五条中島の禹王廟の存在が事実ならば日本における最古の禹王遺跡であり、最初に京都で治水神として禹王が信仰されたことを意味する。『擁州府誌』は1686年に黒川道祐により編集、完成された。内容は京都の地誌であり、近世前期頃の知識や伝聞が中心である。資料的には中世の直接的証拠にはならない。一方、『相国寺蔭涼軒日録』長享2年(1488)8月11日および同21日の条に記す記事は直接的証拠である。すなわち、後藤佐渡守の話として次のように記す。「わが先祖が六波羅の命により綴法師なる悪人を捕らえ河原者に処刑させたところ、河原者に祟ったことから怨霊払いの廟を築いた。近頃、この五条橋下の河原の社を夏禹廟と呼んでいるが、事實は燕丹之社というのが正しい」。日録の記述から、15世紀中頃の五条橋下に夏禹廟とよばれる祠が河原に存在したこと、水辺にあることから禹王廟と呼ばれたらしいことが判明する(図4)。この当時には禹王が水神と認識されていた。また、五条橋中島は安倍晴明が鴨川治水を祈願し、彼にまつわる法城寺や清明塚などが所在する聖地とされる。そして、橋東付近に集住した声聞師(民間の下級陰陽師)らにより晴明信仰とともに禹王信仰も維持されたのだろう。本来の燕丹之社が夏禹廟として治水神に変貌し信仰されるようになった背景に声聞師らによる治水信仰への強い願望と宣伝活動があったことが推定される。しかし、1592年以降、豊臣秀吉による京都の大規模都市改造や陰陽師らへの弾圧と強制移住策により禹王廟は消滅してしまった。

##### 2) 弁財天社

『擁州府誌』の記述によると、禹王廟とセットとしてその北方に祀られた弁財天社はどうかろう。

『山州名跡志』(1711年)には白川に架かる大和橋北に社があったことを記す。四条大和と大路北方には弁財天町が現存している。これは1670年所司代による寛文の築堤工事後、河原地に新地として開発された6町の中に弁才天町が認められる。新堤工事以前に弁才天社が存在したことは確実であろう。

『京都坊目誌』(1915年)によると、寛永10年に木像とともにこれを青蓮院に移したが、明治5年に廃したという。今日でも、白川が鴨川に合流する川端通の横に弁財天社が地蔵堂とともに祀られている。

##### 3) 仲源寺の目やみ地蔵

四条大和と大路東にあり、目やみ地蔵とよぶ立派な地蔵菩薩像を祀る。『京町鑑』(1762年)には「定朝の作にて地中に埋もれしもので、目に土砂入りて目をやみたるごとく見えるにより目やみ地蔵とよび、眼病

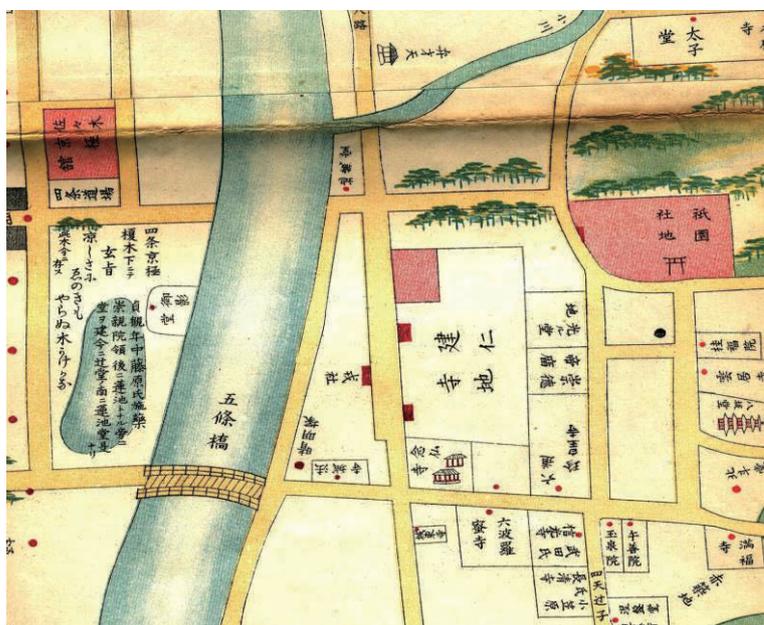


図4 中昔京師地図(1753年) 四条—五条間の鴨川

平癒に靈驗あり」という。仲源寺は先の勢多判官為兼に禹王廟と弁財天社を祀れと示唆した異僧がこの寺に入ったといわれ、この地蔵が僧のなり代わりであるともいう。また、『扁額軌範』（1819～1821年）ではこの地蔵が禹王の像であるとしている（図5）。

#### 4) 大和大路四条角の神明社

かつて大和大路をはさんで南座と向かい合って神明社（伊勢大神宮）が存在した。しかし、現在は存在しない。『山城名跡巡行志』（1754年）によると、かつてこの付近に住む大鯉を殺したところ祟りがでたため、これを祀って魚社とよんだという。これがやがて禹王社と呼ばれるようになり、洪水の難をおそれて祀る信仰に変わったという。古代黄河の水神は魚蛇であり、鯉は聖なる魚で禹門口に位置する登竜門で著名である。ここには鯉と禹王を同一視する強い水神信仰が反映している。

#### 5) 大和大路南方 恵比須神社

天明8（1788）年の天明大火は鴨川東岸団栗辻付近から出火、強風にあおられ西岸へ飛火、京都市街地のほとんど焼失した。しかし、建仁寺門前の恵比須社は被災をまぬがれた。『万民千代乃礎』（1789年）によると、この社が災を逃れたのはかつて夏禹王を祀っていたことからこの社が禹王社であり、水徳の神であり火災をまぬがれたのも当然だと述べる。

以上の記述から、鴨川東岸の四条～五条間に禹王に関わる寺社、廟が集中的に分布すること、出現しては消えていく移ろいやすい存在であることが考えられる。核心は五条中島の禹王廟であり、北方の大和大路白川付近に弁財天社が現れ、目やみ地蔵を祀る仲源寺、西に隣接する神明社、大和大路四条南の恵比寿社へと続く。これらは、①すべて鴨川東岸に位置する、②この地域は近世前まで鴨川の河原であり、右岸の市街地を水害から守るための犠牲地として水害常襲地となっていた、③五条付近を中心に河原者、下級陰陽師や聞声師など貧困層の集住地であり、かぶきや見世物などの小屋がたつ俗な空間でもあった、④寛文新堤築造後の土地開発による新地であり、祇園町や宮川町など新興の遊興地として発展した。ここの住民は花柳界にかかわるものが多く水に関わる特有の信仰をもっている、などの点が指摘できる。治水神・禹王信仰は事情により衰退したり、また必要に応じて場所を違えて出現するような不安定ではあるが地域住民の深層に根ざした強い信仰であったと推定される。

京都鴨川は暴れ川として水害を繰り返し発生させてきており、今後もその高いリスクへの対応が求められる。一方、水害を伝承する水害記念碑や改修事業記念物など防災的遺産とすべきものがほとんど存在しない。筆者の調査では、昭和10年大水害に関わる上賀茂の『水害記念碑』および上立売小川の『洪水碑』の2件のみが確認できたにすぎない。両者とも地元民が水害の記録と伝承を目的に私費により建立したものである。このように、水害の伝承遺物や記念碑がきわめて乏しい状況下、鴨川の治水神信仰に関わる遺跡と信仰を水害の文化遺産として広く普及し、災害教育や防災活動に活用することは大切な作業といえる。

## 5. まとめ

- 1) 古代中国における治水英雄・夏王朝創始者の禹王（名は文命）にまつわる遺跡が日本の北海道から沖縄まで分布する。その総数は2017年3月末に116件に達した。遺跡には禹廟や禹王を祀る社、彫像や肖像画、禹王碑、禹の文字を刻む石碑などがある。その建立は17世紀前期から普及し、明治維新後も今日まで増え続けている。日本文化の中に禹王信仰は深く浸透しているといえる。
- 2) 日本において禹王は①治水神としての信仰、②聖人君主としての崇拝、③治水や善政の功績を賞賛する比喩としての禹王の引用、などの受容と利用の形態が存在する。
- 3) 利根川、酒匂川、木曾三川、淀川など大河川流域の水害常襲地において根強い治水神信仰として受容されてきた。ここには禹王廟や禹王像、禹王碑があり、現在も禹王祭など祭礼行事を実施している地区が多い。



図5 禹王像ともいわれる  
仲源寺の地藏菩薩

- 4) 京都には3件の禹王遺跡が存在する。その存在意義はそれぞれ2)の①～③に相当するものである。とくに、鴨川五条中島に建立された禹王を祀る夏禹廟は日本において最初に治水神禹王を受容したものとして注目に値する。その成立は1228年とされるが、確実な記録からは1488年に五条中島に夏禹廟とよばれるものが存在した。
- 5) 治水神としての禹王は鴨川東岸の弁財天社、仲源寺、神明社、恵比須社などとして時と場所を変えて出現するうつろいやすい性質をもつ。この地域は鴨川の水害常襲地を開発した新地で、花柳界に生きる人々のなかに根強く信仰されてきたことが推定される。水害のシンボルとして鴨川の禹王遺跡や信仰を位置づけ、これらの事実を普及・周知させる活動が今後の課題といえる。

#### 参考文献

- 1) 大脇良夫・植村善博編：治水神禹王をたずねる旅，人文書院，2013.
- 2) 京都国立博物館・宮内庁京都事務所・京都新聞社編：京都御所障壁画―御常御殿と御学問所，京都新聞社，2007.
- 3) 林屋辰三郎：角倉了以とその子，星野書店，1944.
- 4) 瀬田勝哉：洛中洛外の群像 失われた中世京都へ，平凡社，1994.
- 5) 山田邦和：鴨川の治水神，花園大学文学部研究紀要，32，pp53-86，2000.